

2020年度 学校評価自己評価 2021.3.30

1. めざす学校像

<p>大阪女学院の建学の精神 (ミッションステートメント/2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は 創造主を畏れキリストの教えに従って 一人ひとりを愛し 何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって進んで社会に仕える人を育む</p>	<p>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</p> <ul style="list-style-type: none"> *キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人 *自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人 *英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人 *性別の役割にとらわれずあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人 *社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人
---	---

2. 中期的目標

<p>運営基本方針（2020～のⅢ期中期計画において） グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたり育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> *教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。 *これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。 *本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。
<p>2020年度事業計画より</p> <p>I. 建学の精神と教育理念</p> <p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化 大阪女学院は、キリスト教に基づく教育をめざし、神を畏れ、真理を追究し、愛と奉仕の精神で社会に貢献する人間を育成する。そのため、一人ひとりが神に創られたかけがえのない存在として愛されていることを認識し、自分と同じように隣人も大切にすると共に共存関係を構築するという、キリスト教に基づく人間理解を深め、与えられている豊かな可能性を生かして、社会に奉仕する知恵と知識を身につける。また保護者に対しても、ホール会活動を通して、キリスト教に基づく教育への理解を深めてもらえるよう努める。</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築 学院の歴史と建学の精神、祈ることを、礼拝を通して学ぶとともに、社会に貢献する奉仕の心を養い、国際的なミッションによって設立された女子教育機関としての学院の存在意義を再認識する。毎朝の礼拝を通して、沈黙の中に創造主を畏れる気持ちを抱き、説教と証からキリストの教えに従う勇気を養い、一人一人を愛するまなざしを育てる建学の精神を体現する人を育む。</p> <p>II. 教育の内容と学習支援 上記の教育理念を具現化するため、生徒一人ひとりが与えられた賜(たまもの)を活かし、社会に貢献するための学力、協調性をもった行動力、自己と他者を大切にすると共に人権意識、円滑な社会生活を営むための規範意識、そして世界平和を実現するための国際性を身につけること、「真の生きる力を養う教育」を目指し、教員同士、互いを尊重し、助け合いつつ、教育活動を行う。新学習指導要領を目指すグローバル人材の育成、及び高大接続改革等の教育の方向は、創立以来本校が目指してきた教育の理念と重なり合うところから、探究型・教科横断型の学びへの移行を、教育改革の機会と捉えて積極的に取り組む。</p> <p>また、本校は2018年2月に、国際バカロレア機構日本語ディプロマ(以後IB・日本語DPと表記する)のワールド・スクールに認定され、同年4月に英語科国際バカロレアコースを開設した。2020年度は、第1期生がDPYear2を迎え、秋の最終試験等を受ける。在籍者全員のフルディプロマ取得をめざす。IBの理念は、本校の教育理念と一致するため、IBのカリキュラム、授業、評価についての学びをすべての専任教員で今後も継続し、本校の授業改革を推進する。また、IB DPワークショップの会場校にエントリーするなど、学びの機会を大切にして全国の学校、教員との交流を深める。(2020年3月に本校においては2回目のIBWSを開催する予定)</p> <p>1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自学自習できる主体性と自己管理能力を身につけるため、計画的な学習、スケジュール管理の指導を継続する。(OJダイアリーの改良や学習計画書の活用等の継続) ・生徒本人の取り組み、教員の進路指導のあり方を見直すため、個々の生徒の学習状況を学力検討委員会にフィードバックし、改善策を検討、提示する。 ・学習のルーティーン環境を整備するために、学校行事の発展的見直しを行っていく。 ・論理的思考を基に自らの考えを構築し、表現できる力を育てる。その育成のために、中学1・2年生の「論理エンジン」の指導内容を全教員で共有する。 ・2018年度に中3総合でスタートした探究型授業「課題研究レポート」の内容を改善、継続し、文書作成の形式と基礎力を全員に身につけさせる。 ・中学校での英語、数学の分割授業による丁寧な指導、及び中学1・2年生の放課後の学習支援を必要とする生徒の支援について現行のあり方を見直し、新たに適切な取り組みを打ち出し、基礎学力の定着に努める。 ・高校新指導要領「総合的な探究の時間」の内容を従来のもよりさらに生徒達の自主的な探究活動にするため、協議検討を行い、先行的に実施可能なものは行っていく。 ・高校において、夏休みの実力錬成補習、高校3年生対象の大学入試準備及び直前プログラムを継続、発展させる。また水曜講座(高校3年文系有志補習)、土曜講座(チューター制によるスタディーサプリ)の内容も精査しつつ、より発展させたものにする。 ・成績不振に悩む生徒対象のモチベーションアップや基礎固めの講座と、高いレベルで発展的な内容を求めている生徒対象の講座など、異なるニーズに対応すべく、各講座の内容、実施形態について再考する。各々の講座の学習成果のリサーチと分析を定期的に行うことを目指す。 ・個別学習支援としてICTを活用した自主学習教材の提供の充実のために、BB講座(高校生有志への放課後予備校との提携によるネット配信講座、有料)やスタディーサプリ(リクルート社が提供する動画配信学習システム：有料)を継続し、家庭学習で学力の補完を生徒自ら行うことができる環境として提示する。 ・英検準1級のための対策講座(水曜7・8限)を今後も継続し、高校生をはじめ中学生(主に国際特別入試入学者の有志対象)に受講を勧める。 ・2018年度高校1年生からe-ポートフォリオ作成指導のために始めたベネッセのClassiを、進学の際に使われる「JAPAN e-Portfolio」に接続できるよう、発展的に取り組み、生徒自身が絶えず振り返りをすることで、自己の成長につなげる。→V-2.(1)探究型学習への取り組み ・新学習指導要領でも提示されている、より主体的な学習および適切な評価の確立のため、中学校課程でのIB MYP(ミドル・イヤーズ・プログラム)の導入を検討する。生徒が自立し、基本的な生活・学習習慣を定着させ伸ばすために、学習・行事・クラス運営における教員の役割を、ファシリテーター、コーチとして見直し、生徒へのアプローチを再構築することを課題とする。併せて評価方法の見直しを重視した教授方法を確立していく。 <p>2. 高等学校英語科・英語教科の改革 →V-2.(2)英語科、教科としての英語の改革の継続/V-2.(4)「国際特別入試制度」の継続と発展、国際理解教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度に開設した英語科国際バカロレアコースの1期生が、IBDP Year2を迎え、11月には初めての最終試験を受ける。生徒が安心して試験に臨めるよう、準備を進める。 ・4技能外部検定試験に対応するため、高校の早い段階から積極的に受験を促す。高校英語科英語コースの目標は、CEFR [B1]～[B2]レベル-英検2級(高2秋まで)、準一級(高3)、TOEIC 600以上(高2)780以上(高3)、GTEC CBT1000以上(高3)とする。英語科国際バカロレアコースの目標はIELTS 5.5以上とする。 ・授業、放課後の有志補習などで取り組んできた英語の外部資格テスト対策を継続する。中学・高校ではGTECを複数全員が受験する。また、高校ではGTEC-CBTの受験の奨励を継続する。 ・高2の2学期初めに行うエンパワーメントプログラムの発展と継続。1～2学期の授業においてエンパワーメントの教材を用いた実践を次年度も継続、発展させる。また同時期、中学生の希望者を対象に、英語でのコミュニケーション運用能力を実践できる学習機会として、2018年度夏期より実施しているプレエンパワーメントプログラムを継続する。 <p>3. 高等学校普通科文系コース及び理系2コース制の整備、充実 →V-2.(5)高等学校普通科(文系、理系)の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普通科文系コースの生徒のモチベーションアップと多様な進路志向に応えるため、カリキュラムとシラバスの充実、特別プログラムの新規開発を検討・実施する。 ・受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系を1類、2類の2コース制を充実したものとし、生徒の志望する進路が保障できるよう整備していく。 <p>4. 国際理解教育の推進、留学制度の充実 →V-3. 留学制度の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・中期留学・年間留学)については、留学先でのホームステイの環境を整えることが難しくなっている上、斡旋業者の対応も変化している。留学先の学校プログラムが多様になり、教育内容を十分に吟味することが難しくなっていることから、留学先の整理や見直しを行い、安心して充実した留学制度の構築を行う。また、学内の受け入れ家庭を見つけることが困難になってきていることから、従来YFUより年間留学生と姉妹校Ravenswoodより短期留学生を受け入れてきたが、2020年度より、単位認定を伴う年間留学は、交換留学の場合のみとする。また、ボストン海外研修は2019年度をもって終了とする。 ・海外の大学への進学について、生徒・保護者の進路相談、海外大学との入学提携、奨学金確保についてのカウンセリング、それらの情報の収集について、2019年度から担当部署を新設し専従職員を1名置いた。今後、この進路指導部の海外進路担当部署と連携していく。 ・高1・2対象夏休み10日間のアカデミック海外研修を実施し、ボストン海外研修に代わる研修先および、中学生対象の海外研修(候補地：オーストラリア)の企画を検討する。 <p>5. 生徒の人権意識を深める取り組み</p> <p>解放教育(人権教育)については、「私たちの人権感覚を問い直そう」～一人ひとりを大切にしよう～という教育目標の下で、次の事に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人は皆、神によって創られたかけがえのない存在であることを深く認識し、日常生活において、一人ひとりの生徒が大切にされる解放教育を目指す。 ・私たちの身近な差別を見つめ、生き方の本質に深く関わっていることを学び、自他(人間の)解放のために何ができるかを考える。 ・世界の人権の状況を知り、人権を獲得し、守り、発展させていく意味を学ぶ。また、教職員の積極的な校内外研修参加をすることで、解放教育をさらに実り豊かなものにする。 ・SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 <p>6. 生徒の生活全般に対する指導</p> <p>生活指導については、中学・高校それぞれの発達段階を考慮しつつ、基本的な生活習慣や社会性を養う。特に、人間関係を構築する力、社会のルール、マナーを守り、礼儀正しく人と接する力、広く社会に目を向け、他者の人権を尊重し、コミュニケーションの中で相互理解を深め、主体的に行動する力を育てる。宗教・解放教育・生活指導・進路指導の各部門が協力して指導にあたる。言葉遣いや挨拶、教室の清掃と整理整頓、正しい制服の着用、基本的なソーシャルスキル、及び生活力の向上に意識的に取り組む。特にSNSによるトラブル等の生活指導事案の適切な対応について、教員の学びを深め整備する。</p> <p>7. クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定</p> <p>国スポーツ庁、及び大阪府教育庁からの指導もあり、生徒の部活動での健全な成長と、教員の働き方改革を考慮し、2019年度から、大阪女学院としての「部活動に関わるガイドライン」を策定し、部活動指導への適用を行い始めた。より有用なものとして継続していく。また、併せて、部活動における活動費出納報告書提出も毎年度末に行う。</p> <p>8. キリスト教・人権・生活指導・進路及びHR等すべての活動、行事を総合したプログラムの構築</p> <p>キリスト教・人権・生活指導・進路及びHR等すべての活動、行事一つ一つにおいて、生徒が主体となり、意義、目的を明確にして計画的かつ探究的に取り組み、協調性をもって自他を活かし、集団を向上させていく力を身につける機会として、学校での活動を総合するプログラムを構築するために、教職員全員で研究、検討する。</p> <p>III. 教育の実施体制</p> <p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>中学校・高等学校 目標生徒数は、学力レベルをできる限り維持しつつ、以下を目標とする。</p> <p>中学校 190名(募集人数)</p> <p>高等学校 115名(募集人数) [普通科文系40名 理系30名 英語科英語コース30名 国際バカロレアコース15名](1)</p> <p>広報の充実</p> <ol style="list-style-type: none"> a. ウェブサイト、公式フェイスブックページ等の活用によるリアルタイムでの学校紹介。 b. 卒業生の働き～時代を越えてつながる愛と奉仕の精神～取材広報の継続。 c. 目的別学校紹介資料の作成・改良。 d. 学校案内を中高別とし、中学用を4月に、高校用を8月に発行。 e. 新しい広告媒体の研究と積極的な活用(梅田、京橋、三宮の三駅に展開した映像広告等)を探り、有効ならば実施。 f. 広報用の短い動画、数種類・学校案内ビデオの効果的な活用。 h. 従来の公式ホームページや公式Facebookに加え、公式Instagramによる情報発信。 <p>I. 上記の広報の充実、身の丈に合った運用資金を考慮しながら適切なものとなるよう配慮していく。</p> <p>(2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み</p> <ol style="list-style-type: none"> a. 全教員での在校生の出身公立中学校訪問、校外での説明会、広報活動の実施についての見直し。 b. オープンキャンパス、キャンパスナビ、入試説明会の回数、日程、種類、事前広報の検討。 c. 在校生、卒業生の保護者、卒業生による「保護者のためのevening説明会」の改良と継続。 <p>(3) 入試対策室の充実</p> <p>可能であれば入試対策副室長を継続して配置する。また、入試対策担当の事務職の配置を検討する。</p>

(4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展

- α. 中学「国際特別入試」の拡充と広報をはかり、この入試制度と英語科国際バカロレアコース(日本語DP)との接続を目指す。
→V-2-(3)「国際特別入試制度」の継続と発展、国際理解教育/V-2-(4) 2018 年度英語科IB(日本語DP)コースのスタート

(5) 英語科国際バカロレアコース募集のための広報活動

- α. オープンフォーラム、公開授業の実施、見学者の受け入れ(月1回程度)体制の整備。
- b. 英語を母語とする本校教員による在日の国際各種学校(インターナショナルスクール)訪問。

(6) 高大接続改革についての広報活動

- a. 大学入試制度改革に向けた、e-ポートフォリオ活用の取り組みを広報で紹介する。
- b. 現在行われている阪大生物学実習、京大 iCeMS(アイセムス)キャラバン、奈良女子大、関学、同志社、同志社女子等の大学研究室の訪問、受講等のプログラム等を広報で紹介する。

2. 教職員の組織改善と総合的教育プログラムの構築

若い世代が、中高6学年を偏りなくすべて経験し、どの学年に所属しても展望をもって指導できるように人事配置を行うよう努力する。また、本校が大切にしてきた理念、指導やその具体的なスキルの継承とともに、育むべき生徒像の再確認を行う。その上で、これまで蓄積されたキリスト教、人権、生活指導、進路他、各分掌、行事、教科の取り組みを、生徒の主体的探究的な成長を目標とする新しい総合的なプログラムとして作りかえていく。また、これを機によりよい教育活動と働き方改革についての教職員、生徒、保護者の認識についてコンセンサスを得つつ更新し、合意していく。今後も変わることなく、キリスト教に基づく人間理解を深め、教職員の誰もが自分の内面に向き合う時間を大切にしていけるように、キリスト教教育の基盤となる毎朝の礼拝と、各自のキリスト教信仰の理解を深めるよう、それぞれの所属する教会での日曜日の礼拝と活動を保証する働き方を目指す。その補いとして、伝道週間前に教職員礼拝を行う。

3. 中学・高校図書館機能の充実

(1) 蔵書・資料の充実

各教科の調べ学習がより深化するよう図書、雑誌、データベースなど各種の蔵書・資料を充実する。

(2) 利用サポート

- a. 国際バカロレアコースのカリキュラムの円滑な展開及び総合学習等の調べ学習の深化をサポートできるよう情報収集等を行う。
- b. 授業及び行事が一層充実するよう、教科担当者等と連携して各種資料ガイドを作成する。

(3) 図書委員会活動

読書感想文コンクール、文化祭古本市、ビブリオバトル、選書会などにおいて、生徒の主体的な活動を教員と連携して支援する。

(4) 施設・設備

- a. 図書館ラーニングコモンズのアクティブラーニングを始めとする幅広い利活用を進める。
- b. 中学校・高等学校の生徒専用の Wi-Fi 敷設を検討する。

(5) 広報の充実

入口のディスプレイ(サイネージ)をホームページやFacebookなどを活用し、情報発信力を高め、一層の利用促進を図る。又、今後を踏まえ、ホームページの内容も検討する。4.

中学・高校教員の人材育成

(1) 大阪女学院の教職員としての全体研修

年に一度、大阪女学院の全体の教職員研修会を継続し、全員の参加をめざす。研修では建学の精神を共有し、その実現に向けて本校の歴史や教育の流れを学ぶとともに、世の中の変化の中で、教育全体が、また本校が直面する問題について情報を共有し、連帯を深める機会とする。

(2) 支え合う組織づくり

- 多忙を極める中でも教職員が孤立せず、相互に信頼し合い、支え合うことのできる組織づくりをめざす。
- ・新任を中心としたすべての教員が、事例研究、ワークショップなどで親睦を深める機会となるような機会を企画し、実施する。特に新任教員においては、キリスト教学校教育同盟の第1回カウンセリング事例研究会や秋季に行われるキリスト教教育同盟新任研修会への参加を義務づける。
- ・教員のコーチ、ファシリテーターとしての資質を開発し伸ばすため、クラス経営や行事指導のガイドラインの確認、実践的な研修やワークショップによる事例研究の機会、サポート体制(学年主任、校務担当責任者、管理職、学校カウンセラー等との連携)の整備と充実をはかる。
- ・校務分掌という業務分担のあり方について検討する。セクト的にならず、プロジェクト毎に有機的かつ責任が明確な業務分担が必要である。また情報の共有は現状の制度ではICTで補うことや、働き方改革面から再度週5日制に戻すことも可能性として検討する。
- ・校務担当の責任の偏りをサポートしあえるよう、学年担任制導入やクラブ顧問体制見直しを検討する。

(3) 他校との連携

キリスト教学校教育同盟による新任研修、事例研修、中堅者研修、大阪私立学校人権教育研究会の新人研修、その他の研修に積極的に参加することによって、他校との情報共有と各員の技術向上を目指す。IB教育を通じての教員、学校間の交流を大切にし、助け合い、互いのよいところを学びつつ向上していく機会を積極的にもつ。

(4) 新しい学力観及び探究型学習への対応

→V-2-(1)探究型学習への取り組み/V-4. ICT教育の発展

- ・学力についての考え方が、「知識・技能」中心の狭義的な学力から、「思考力・判断力・表現力」及び「主体性・協働性・多様性」を含めた広義的な学力へと変わっている。また、これらは相互に影響しあうので、従来型の狭義的な学力向上とともに探求型学習を実践し、広義的な学力向上を進める。
- ・振り返りを各教科・各行事で実践し、内省を促し、メタ認知能力の育成が不可欠である。また、面談等で教師がティーチング・メンタリングはもちろん、コーチングするように実践していく。教師も各研究会参加、IBワークショップに参加してスキルを磨いていく。
- ・IBをモデルとして学習の評価のあり方を改革し、授業において獲得すべき学力の新しいイメージを確立していく。そのために定期試験問題、日々の課題のあり方も徐々に変更していくべく研究を進める。
- ・英語科国際バカロレアコースでは各自で購入したChromebookを使って授業、提出物、スケジュール管理を行っている。現在他の学年、コースでは、授業で一斉に使う場合は学校購入のChromebookを貸し出しているが今後は、e-ポートフォリオ作成や探究型授業などで個人用端末機が必要になることから、各自購入を検討する。
- ・中学1・2年生に導入している「論理エンジン」について国語科が主導し、全教員の取り組みとしていく。
- ・2018年度に思考・表現する力を育成するための教科横断型のカリキュラムとしてスタートした中学3年生総合の課題研究レポート制作の授業を継続、発展させる。(5)

人権意識の向上

- ・教職員の人権意識を更に高め、授業やクラブ活動での指導はもとより、日常における生徒との関わりの中で、生徒の人権に配慮した指導が十分出来るよう啓発と研修を行う。そのための一つとして、2018年度からはじまった、学院全体の教職員対象キャンパスハラスメント講習会を今後も継続していく。
- ・いじめ、キャンパスハラスメント事件を未然に防ぐため、学校全体で積極的に取り組む。キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を、生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。キャンパスハラスメントに関する調査を継続して行う。
- ・多忙な中でも日頃からコミュニケーションを怠ることなく、互いに支え合い、また現場の課題について話し合える教職員集団を目指す。
- ・2年前から、秋期は生活指導委員会と連携して教職員対象学習会を行っており、充実した学びになっているので、継続して行う。また夏期に教職員対象のフィールドワークを実施し、広い視野と正しい知識を養う機会とする。
- ・SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて、教職員も機会をとらえて学習する。(2019年度から学院全体でICT教育についてのガイドラインが策定されている。)

5. 中高大短連携プログラムについて

キリスト教・解放(人権)・英語の3分野を中心に連携し、大阪女学院全体として独自の進んだ教育プログラムを生み出す。また、キリスト教学校教育同盟と連携しながら、時代の求めに応じた宗教教育を実施していく。

- ・中学・高等学校と大学・短期大学間の教員の有機的かつ弾力的な教員相互派遣や業務補完を検討する。
- ・社会的かつ国際的な問題に強い関心をもつ中高生の要求に応えるため、学院教育研究センターや大学・短期大学が主催して行う講演会等に中高生の参加を積極的に促していく。
- ・高校英語礼拝(年6回)のうち1回は、大学・短期大学のネイティブの教員に奨励を依頼する。
- ・高校英語科の行事(高1英語キャンプ、高2マルチカルチャーデー)に、大学・短期大学のネイティブの教員に講師として継続的に参加を依頼する。
- ・チャペル礼拝、伝道週間のクラス礼拝の奨励者を大学、短期大学の教職員に依頼する。
- ・大学短期大学から依頼があれば、中高教職員が礼拝の奨励を行う。
- ・グローバル進路を希望する生徒・保護者が、海外での留学経験のある大学教員に提案、助言等を受けられるよう、連携の仕組みを検討する。

IV. 生徒支援

1. 生徒の自己実現を促す進路指導

導(1)進路選択への指導、助言

センター試験は2019年度(2020年1月)の実施を最後に廃止され、これに代わり2020年度からスタートする「大学入学共通テスト」がこれまでと同様、1月中旬の2日間で実施される。確かな基礎学力を身につけることをもって、生徒に視野を開き、自分たちが取り組まなければならない課題とともに将来を考えることの大切さを認識させる。また、2019年度から始めた『高校生のための学びの基礎診断』の測定ツールを用い、生徒と教師が学習成果や課題を共有することにより、生徒は自分の学習への取り組み方の改善を、教師は指導の仕方を工夫し、授業の充実を目指す。自分自身の進路目標を高校2年時点で明確にすることができるように、進路HRの意味づけをはっきりとさせ、充実させていく。思考力・判断力・表現力育成について研究し、プレゼンの機会などを提供していく。このように、生徒が自立・自律し、基本的な生活・学習習慣を定着させ伸ばすために、学習・行事・クラス運営における教員の役割を見直し、目標を共有すべき時期にあると認識し、ファシリテーター、コーチとしての観点から、生徒へのアプローチの再構築を行う。

(2) 基本的学習習慣の確立

- ・毎日の授業に取り組む姿勢の指導を丁寧に行う。
- ・定期試験2週間前に発表される試験範囲に沿った学習計画と準備を徹底させる。
- ・中学ではOJダイアリーを改良し、取組みを継続、学習習慣を身につけさせ、学習意欲の向上を目指す。
- ・テスト勉強だけにとらわれず、将来の進路を見据えて、毎日の学習計画と努力目標を考え、実行できる力を育てる。
- ・学習のPDCAサイクルを確立させ、能動的に考え行動する力を促進する。
- ・ポートフォリオを蓄積し、振り返ることによって内省を促す。自らの課題を見つけ、次の学習につなげる習慣を養い、新入試・新課程にも対応する力を育てる。
- ・ビッグシスター学習支援制度を継続していく。→II-1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み

み(3)「大学入学共通テスト」への英語外部検定資格利用への対応

2021年度入試からの大学入試改革の一環としての英語外部検定試験スコア利用(英語成績提供システム)の施策が始まる予定であったが、2019年秋に急遽見直しが行われ、2024年度入試からに延期された。しかし、本校では引き続き英語外部検定試験受験を推奨していく。よって、検定対策を含めた授業内容の充実、講座の開設をはじめ検定日にあたる日曜日のクラブ活動のあり方等、具体的な課題に取り組む。中学生から英検とGTECの受験を勧め、高校生には進路指導の一環として受験を促していく。また、本校での高校2年生のGTEC受験をオフィシャルスコアに変更し、対応する。

(4) 新しい大学入試への対応

- ・年ごとに大きく変化する大学入試において、生徒たちの希望する進路が実現するよう的確な情報の提供に努める。特に2019年度から、「多面的・総合的」に評価する入試が関学などで始まり、国公立大学でも2021年度入試で取り入れる大学があることが発表されたことや、高校での活動履歴を記載していくポートフォリオについて、生徒の意識づけに力を入れる。高等学校時代に、学習に加えてクラブ活動・ボランティア活動など様々な活動を経験していることが求められるため、宗教や人権、生活指導、進路指導など各部との関係を密にし、総合的な実践プログラムを推進する。志望理由書や大学での学習計画などを文章化できるように指導していく。
- ・ベネッセの教科学力模試、『高校生のための学びの基礎診断』の測定ツールであるスタディーサポートの積極的な活用を促す。また、非認知能力を測定するツールも積極的に活用し、生徒の特性を把握しながら進路指導に活かしていく。
- ・先述の2021年度に向かう高大接続改革や学習指導要領の改訂により、国公立大学英語入試については4技能を測る外部検定試験のスコア利用の施策は一旦延期となったが、方針は変わらないことから、高校生に英語の外部検定試験(4技能)の受験を勧め、高校2年生までにCEFR[B1]に相当する英語資格取得をめざすよう指導する。
- ・国公立大学の推薦入試に向けて適切な指導ができるよう、これまでの実践内容、指導のポイントを整理する。

(5) 大阪女学院短大・大学という併設の特色を活かした進路指導

併設短大・大学の優れた英語・国際教育、留学や他大学への編入プログラム等を視野に入れ、特色を活かした進路指導を行う。

(6) 協定校推薦枠・指定校推薦枠の拡大

- ・協定校推薦枠は関西学院大学44名、同志社女子大学10名、神戸女学院大学4名がある。被推薦生徒の学力向上のために英語の外部試験資格の基準を設け、被推薦者としての指導を強化する。また、思考力・判断力・表現力の向上、大学での学びに対する意欲を喚起する。各大学と協定校としての高大連携を深める。
- ・大学の定員管理の強化に伴い、指定校推薦枠が減少傾向にある。関学を含む特色ある多くの大学と交流を深め、積極的に新たな関係を築いていく。

2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

- ・授業、学級活動、生徒会活動、クラブ活動、その他の活動が安全かつ充実したものになるように努める。
- ・自ら健康の保持増進を図ることができる能力を育成する。そのため保健室・教育相談室(学校カウンセラー)、サポートルームが連携し、生徒・保護者をバックアップする。
- ・生徒支援の観点から、学級担任制から学年担任制への移行の検討を行う。

- ・不登校や発達障がいなどハンディを持ち支援を必要とする生徒をサポートするため、「支援教育委員会」を充実させるとともに、教職員研修の機会を持ち、支援のための学校チーム力を向上させる。
- ・障がいを持つ生徒が他の生徒と平等な教育を受けるために、適切な調整・配慮をおこなう。
- ・サポートルームについては、指導員が保健室と連携しながら、利用生徒の成長に寄り添う支援をさらに進める。支援教育アドバイザーのアドバイスをもとにして、支援を必要とする生徒への教員の指導力を高める。
- ・必要に応じて、生徒の主治医や関係機関と連携をとり、適切な支援をめざす。
- ・生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。
- ・通学時の安全指導に努め、不審者から生徒を守るために警察と連携する。
- ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。
- ・「部活動に関わるガイドライン」を運用するとともに、今後は外部委託等の可能性について検討する。
- ・スマホ依存、SNSのトラブル、悩みに対するサポート、指導を、保護者と連携して進める。
- ・学校生活とは、人と人が出会い、コミュニケーションをとり、ともに何かを作り上げる経験をする場所であることを再認識し、集団生活・クラブや行事でのリーダー経験などで培われる非認知能力を総合的に獲得する学びをめざす。情報端末に依存することのないよう、時間の正しい使い方も併せて指導していく。

V. 改革・改善

2020年度の課題として、とりわけ以下の項目について重点的に取り組む。1.

時代の求めに応じたキリスト教教育の充実と推進

クラス礼拝の生徒がお話する機会を、自らの経験を振り返り、思考し表現する活動と位置づけるとともに、キリスト教との主体的な出会いと捉え、キリスト教教育の充実と推進をめざす。また、特別の教科となる「道徳」の4領域22項目を意識する「聖書」の授業シラバスについてキリスト教学校教育同盟と連携して研究する。

2. 生徒の学力向上について

- (1) 探究型学習への取り組み → II. 教育の内容と学習支援 - 1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み
- ・2018年度入学生よりスタートした高校英語科課程、国際バカロレアコース(日本語DPは2019年度より実施)の教育プログラムを教職員全員で学び、探究型、教科横断型の授業研究を進めるとともに、中高全ての授業を探究型の学びとして展開することをめざす。
 - ・中1・2に導入した論理エンジンによる指導、論理文章能力検定受験、中3での探究型課題研究レポートの授業を継続発展させる。
 - ・2020年の大学入試改革に向けてキリスト教・教科学習・人権学習・ボランティア・クラブ・生徒会等のあらゆる活動を関連つけた総合的なプログラムの構築を目指す。また、高校1年生より、行事、キリスト教、人権、進路のプログラム、クラブ活動での学び等を、PDCAサイクル-Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)を意識したe-ポートフォリオ作成の取り組みを今後も推進する。
 - ・受動的な授業から、能動的な授業への改革を行うとともに、日常的な観点別評価の積算が、学期末、学年末の成績に反映され、生徒の意欲関心を引き出すものとなるよう新しい評価基準の作成に取り組む。

(2) 「国際特別入試制度」の継続と発展、国際理解教育の推進

- ・中学「国際特別入試」の拡充と広報をはかり、高校英語科国際バカロレアコース(日本語DP)との接続をめざす。また、時勢を鑑み、この入試制度の発展型として、中学入試内に英語教科入試の導入を検討していく。
- ・中学国際特別入学生の学習プログラムの充実を図ると同時に、2018年度8月より実施した中学生有志のプログラム、プレエンパワメントへの参加を促し、国際理解教育、英語科国際バカロレアコースへの関心を高める。さらに、中学英語キャンプ、短期語学研修、ボランティアワークなどのプログラムの開発も検討する。
- ・「国際特別」入学生を中心とした国際理解教育のプログラムを企画、検討する。
- ・南校舎1階に設置したラウンジを有効に活用する。
- ・2018年度放課後に開設した英検準1級のための対策講座の中高生への募集を継続し、発展させる。
- ・中学校でのIBMYP(ミドル・イヤーズ・プログラム)の導入を検討する。

(3) 2018年度に開設された、高校英語科国際バカロレアコース(高校2・3年次日本語DP)の今後

- ・2020年11月高校3年生の最終試験で、コースの生徒全員のDP取得をめざす。
- ・国際バカロレアコース入学の生徒・保護者には最終試験、DP取得に向けて十分説明を行い、準備を進める。
- ・カリキュラム、シラバスの改善、授業内容、施設設備の充実を図り、英語科国際バカロレアコースへの入学を考えている内部生、他校からの受験生、保護者に国際バカロレアコースについての説明を十分に行う。
- ・IBワークショップに専任教員全員の受講を進め、コアプログラムの意義を全校でシェアし、全教職員のIB教育への理解を深める。
- ・教職員、生徒のアカデミックオネスティ(学問的誠実性)についての意識を向上させるよう取り組む。導入した剽窃チェックのためのPCソフトを、必要な全教職員が利用できるようにする。
- ・現在の宗教・人権学習・ボランティア・クラブ・生徒会・体育等の活動・行事とCAS活動が関連し合い、発展するような環境を整える。
- ・毎年3月に実施されるIBDPワークショップの会場として、立候補し、IB関係者の交流、情報交換の場を提供する。
- ・国際バカロレア教育に関心をもつ国内外の大学との交流、提携を積極的に行い、進路指導、進路保障の充実を図る。

(4) 高等学校普通科(文系、理系)の充実

- ・高1・2コース別説明会においてスタディーサポート(ベネッセ学力調査)の結果分析から生徒一人一人の課題を明確にし、到達度に応じて対策を自ら考えさせ、モチベーションアップを図る。
- ・文系コースに2017年度よりスタートした高1対象文系セミナーを継続する。その内容として、各界で活躍する卒業生の講演に加え、生徒のパネルディスカッションなど参加型のプログラムとする。
- ・理系セミナーとしての2020年度プログラムは以下の通りである。
 - 2020年3月 京大iCeMS キャラバン(2019より実施) (S2 20人)
 - 2020年5月 京大iCeMS 訪問プログラム(2019より実施) (S3 54人)
 - 2020年7月 理系セミナー(全理系対象)
 - 2020年8月 神戸薬科大学実習、同志社女子薬学部実習、信州研修旅行、阪大分子生物学実習(S2有志)
 - 2020年10月 阪大タンパク質科学実習(S1有志)
 - 2020年12月 奈良女子大学訪問(S1理系対象)
 - 2021年3月 京大iCeMS キャラバン(S2 20人) (*京大iCeMS キャラバンとは、最先端の科学に触れながら「学びが楽しくなること」を目的としたアクティブラーニングで、生徒の気持ちを学びへの意欲へと向けるプログラムである。)

3. 留学制度の充実

- ・現行のYFU年間留学生の受け入れ、オーストラリアのRavenswood(姉妹校)およびCitipointe校(姉妹提携校)との交換留学、YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月)、中期留学(アメリカ・イギリス・オーストラリア)、その他交換留学制度を利用して留学を希望する生徒、種々の留学、夏期海外研修を希望する生徒の支援を行い、国際理解、他文化理解に取り組んでいく。
- ・高1対象の夏期海外研修(3週間)の内容がさらに充実したものとなるよう、事前学習として中3に、事後の発展学習として、高1にプレエンパワメントプログラムの実施を検討し、国際理解教育を体系立てて行うことをめざす。
- ・高1・2対象アカデミック海外研修(夏休み10日間)を実施する。中学生対象の海外研修(候補地:オーストラリア)を企画し、検討を進める。4.

海外進学サポートの充実

2019年度より、海外進学サポートの充実度を図るため、専従の職員を配置した。国際バカロレアコースの生徒のみならず、すべてのコースの希望生徒の支援に取り組む。

5. ICT教育の推進

ICTの導入について適切な時期、方法を研究しつつ、業務軽減や情報共有とセキュリティ、在宅ワークなどの観点から慎重に推進していく。早ければ2020年度から、そのための専従システムアドミニストレーターを配置していくことを考えている。

- ・WiFi環境の整備が完了した東・北・南校舎における今後のICT教育の促進について検討、推進する。次にチャペル利用ができるような機器の導入を図る。
- ・英語科国際バカロレアコースでは各自Chromebookを使って授業、提出物、スケジュール管理等を今後も進める。
- ・中学、高校の他のコースの生徒についても、探検型学習やe-ポートフォリオ作成のため、またタブレット型情報端末を使用することが優位であるカリキュラムや学習方法(オンラインでの双方向性討論型授業、リアルタイムでの意見集約、創造的な作業学習など、各自が保持することの導入時期について検討する。現在、教員用及び中学高校に研究用として300台のChromebookがリースで使える環境にある。教科、クラスでの利用についてシミュレーション研究を行い、利用を推進する。
- ・上記実施のため、使用ガイドライン、アカデミックオネスティの共有、剽窃ソフトの使用を含め、メディアリテラシー教育を推進する。

6. 中学・高校教務の新(入力)システムの導入準備

成績処理のために、新しいシステムを構築すべく、2018年度中にベータ版の完成がみられたので、2020年度も引き続き検証を行って行く。ただ、2002年より導入されていた成績処理システムがサーバーの寿命とともに一昨年度II学期中間審査から切り替えを余儀なくされた。予定より早い運用ではある。当面の課題は、現在システムのデータチェックと、準備の中の新システム用のチェックを同時進行で行うことである。また、生徒の成績個人情報保管管理についての明確なガイドラインの策定と共通理解が急務である。

7. クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定

国スポーツ庁、及び大阪府教育庁からの指導もあり、生徒の部活動での健全な成長と、教員の働き方改革を考慮し、大阪女学院としての「部活動に関わるガイドライン」を策定し、2019年度から部活動指導に運用を始めた。併せて、部活動における活動費出納報告書提出も行い監査を入れている。クラブ活動のスケジュール、活動費運用のあり方についての改善は必須の課題だ。顧問や外部コーチの導入、日直制度との関連性について考え、適正な人員配置を図っていきたい。

8. 学校危機管理についての検討

- ・大地震を想定した危険回避訓練を継続実施する。
- ・事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定した訓練の計画を進める。生徒教職員に必要な食料と水の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対応などについて検討する。
- ・地域の避難所として一部校舎を提供することを視野に入れ、地域と協力して災害の対策について検討する。
- ・2017年度に作成した大規模震災・初期対応ハンドブックに加えて、地震対応マニュアル及び対策本部に設置する対応カードを作成する。9.

中長期的財政計画-施設・設備の保全充実、経費の削減と効率化

今後、校舎の空調設備、屋上防水、プール補修、チャペルWi-Fi環境の構築、トイレの改修などを計画的に行い、校舎の保全充実を図る。そのために中長期の財政計画を明確にし、適切に補修整備を遂行する。諸経費の見直しを継続して行い、管理部門の経費のさらなる削減と効率化を図る。また、大阪府をはじめとした教育に関する補助金制度を有効活用する。

10. 教員の労務環境改善

- ・「教員の働き方改革」の観点から、2019年度2学期よりICチップによる出勤の管理制度の試行を始めた。これにより勤務状況をより把握することで、労働過多にならないような体制を考える。
- ・有給最低5日間取得の管理をしっかりと行って行く。
- ・部活動の指導、立ち番等生徒指導、広報活動等の教員の業務について見直しを行う。半休、時間制有休制度の検討を行い、有休の取得を推進する。
- ・現行の研修日制度の見直しについて、土曜日全員休業を視野に入れて行う。
- ・労務過多の要因の一つであるクラブ活動時間と日直の業務とを併せて検討する。
- ・教育的観点のみならず労務的関連観点からも、学級担任制から学年担任制への移行の検討を行う。
- ・各会議の持ち方について見直し、運営の合理化による業務軽減を目指す。
- ・IB研修や各所で開催される様々な研修への参加を奨励し、学校外での出会い、学びによって教員のエンパワーと、資質の向上を図る。
- ・今後の教員像(ファシリテーター、コーチ、カウンセラー)を明確にし、教員の業務の種類や範囲を精査し、それ以外についてはアウトソーシングや別事業として切り離すなど、教員の働き方について検討する。

【自己評価アンケートの結果と分析】2021.3.30

自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析
○生徒 [2020年12月、Google フォームアンケートで実施]	○保護者 [2020年12月、紙媒体で実施]	○教職員 [2021年2月、Google フォームアンケートで実施]
<p>宗教教育・解放(人権)教育について 宗教教育について、昨年度同様 85%以上の肯定的な意見であり、高3に至っては 93%の高さであった。これはコロナ禍の中であっても絶やすことなく工夫してチャペル礼拝も守り、不安な気持ちを少しでも落ち着かせる一助になったのではないかと推測される。他者との関わりを模索するうえで、この宗教教育はとても有意義なものであると改めて確信した。</p> <p>解放(人権)教育についても、宗教教育と同じく全学年が 90%以上の肯定的意見を挙げており、それぞれの学年のテーマに即した問題定義を生徒たちが自分のこととして考えたと思われる。ただ中3の修学旅行は結局中止となったので、沖縄の戦争を通じた平和学習の集大成はできなかったことが残念である。「他者容認」の意識の高さも全学年 92%と高い成果がみられた。コロナ禍での人との関わり方を日常のこととして深くとらえた所以であろう。教育とは早急に答えを出すのではなく忍耐を持って涵養し長い時間を要するものだと思う。これからの教育課題は「対話的な深い学び」とされているが、このことこそ学校で学ぶべき中心課題となる。世の中がいかなる状況となるうとも本校の教育方針を持って、これからの社会に関わる人を育てていきたい。</p> <p>宗教、解放のプログラムでの学びは、学年が上がるにつれて、これまでの基本的人権、平和についての学びを継続しつつ現代社会の課題である様々な国の人々との共生、(発展途上国のみならず)日本の中にある貧困、子どもの権利、非正規雇用、ジェンダーギャップ、トランスジェンダーなど、目の前の事象を見つめて、自身の進路や生き方と直結するものとなっている。高3までの3年もしくは6年間で、どの学年も各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムで取り上げる社会的なテーマに関心、理解を深めることに繋がっている。加えて、宗教教育プログラムで聖書の言葉に触れて自己の内面を洞察し、他者との関わりについて考えを深めていく。徐々にではあるが確実に、自己肯定の心を持ち、自分自身の言葉で考え自分自身が社会に良い変化をもたらす主体として自覚し、他者を受容し、助け合うために学ぶという意識を育てていきたい。また一人一人が、より多様化する集団の構成員である以上、引き続き、校内で差別事象に気づき、そのことに立ち向かうことのできる鋭い人権感覚を研ぐべく、教職員、生徒共々取り組みを続けていきたい。</p>	<p>保護者アンケート回収率は、中学 74%、高校 57% 回収率が昨年度よりも中学はアップ、高校は若干下がった次年度は、生徒同様、保護者にもアカウント付与を行うため、アンケート方法を変更しようと考えている。</p> <p>課題の多い項目については、保護者のご支援に感謝しつつ一歩ずつニーズに応える努力を行っていきたい。</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは「2020年度事業計画」に基づき行った分析は肯定的回答のパーセンテージを確認しながら進めたが、今年度の教職員の回答は、例年と比べて肯定的な振り返り(目標到達度)は低い。偏にコロナ禍の影響である。</p> <p>I.建学の精神と教育理念の実践 キリスト教に基づく人間理解の深化/建学の精神の再認識と再構築 キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は92%で、昨年度より8ポイント下回った。本校教育の核となる部分はここにおいてはいいことを全教員が理解していることは大である。そして教職員側からの一方的な押し付けではなく、生徒たちがこの理念を自分の成長に必要であると思うことで完成する。そのため取り組みをさらに進めていきたい。</p> <p>II教育の内容と学習支援の充実 学力向上 中高6年間を見通して基礎学力を定着させることに加えて、改革される大学入試に対応することや新学習指導要領対応のカリキュラム、観点別評価を軸とした教科シラバスを各教科で改訂作業を継続している。何より、コロナ禍で定期考査の実施が危ぶまれた中、全体評価における形成的評価(観点別評価)の割合を大きくできたことは大きい。ただ、やはり学習指導に混乱と困難を覚えたことは、「指導できたか」という質問の肯定的回答ポイントの15%低下に表れている。時代の変化が激しく、教職員の世代交代が行われる中、現状で目の前の生徒と向き合い、根気強く指導の質を維持しようと奮闘している教職員の方を見えにくる数字である。</p> <p>「1年間で生徒の学力(学力推移調査、「スタディーサポート」等を参考に)には上昇したと思うか」との問いについては、今年度は64%と昨年度よりも15ポイント上昇したのは、基礎学力定着についての方策を喫緊の課題と捉えて対策をしたおかげである。さらに上を目指したい。</p>
<p>生活指導について 生徒達は、本校の生活指導の中心になっている「本当の自由」への理解 ~人に言われるのではなく、自分で考えて時々に応じた言動をとる~という目標については、その考え方を理解している。誇りを持って目指していく姿勢は中1から持ってしており、しかし学年が上がるごとに実行の難しさに直面し、その重要さを更に深く理解して行くことになる。今年度においては中1も89%と高く、他学年でも90%以上の肯定的意見であった。</p> <p>具体的には「社会のルールや公共のマナーが身についているか」「基本的な生活習慣(遅刻、片付け、身だしなみなど)は身についているか」という質問についても例年同様 85%~95%台となった。しかしこれら生徒たちの評価は、大人の目から見た評価よりも甘めであるように思う。中高ともに自分の言動の不十分な点には気づいていないところが多いように思われる。よって具体的な指導を事あるごとに丁寧に行う必要がある。保護者との連携を行い家庭の協力を得て進めていきたい。</p> <p>挨拶の取り組みは、今年度生活指導部が少し強化して推進してきたことであり、全体として 90%以上の肯定的意見となった。思春期独特の心理も関係するかもしれないが、気持ちはあっても声に出して表現することが苦手な生徒が多い。社会での大切なコミュニケーションの第一歩として、取り組みを続けたい。</p> <p>「自己管理能力が身についたか」については、中学は昨年度よりも若干下降気味であったが、特に高1と高2においては大きく上昇している。これは、三か月間の休校措置の長い期間でこのことが大きく影響している。つまり中学は教員が具体的に丁寧に取り組む必要があり、高校はスイッチ次第で、自己管理能力が高められるということだ。また高校はeポートフォリオ(現在頓挫している)ことを生徒たちに日常事として考えさせ、記録を実行させていることもこの数字として表れている。今後も生活指導のみならず日常学習定着の重要な項目として、この自己管理能力の獲得が上げられる。OJダイアリーや試験2週間前学習計画書の提出など、具体的な取り組みをICT機器利用も併せながら、続けながら進みたい。大学入試改革等に伴い、スマホやタブレット、パソコンの学びの場への導入を必要に応じて進めている。eポートフォリオの作成や、課題探求型の学びに取り組む必要から、また授業以外の自学自習や放課後学習のツールとして、SNS利用についてのリテラシー、著作権の保護等、アカデミックオネスティーについての学習プログラムの構築がコロナ禍の学校休業によって一気に推進された。課題としてキーボードのタイピング力向上教育の必要があるし、大きな課題として、スマホ依存の傾向が顕著になっているため、その指導の重要性が顕著になってきた。心身ともに悪影響になるものなので、注意をもって指導して行きたい。</p>	<p>教育環境、施設設備の整備についても平均 88%の保護者から肯定的回答をいただいた。 庭の草花や木々は、創立から137年大切にしてきた重要な教育環境である。しかし、休校時間のこともあり、また保護者の来校機会もほとんど出来なかったため、昨年度よりも若干下がったことは当然であろう。チャペルのWi-fi環境を整え、(各校舎は既にWi-fi環境完備)ICTを利用して教育活動がかなり推進された。次年度からは各人の端末所持も始まり、教科活動いやより協働活動に相応しい教室環境を整備していくなど、将来の教育構想に基づき施設整備の充実について検討を進めたい。</p> <p>また、大地震に備えてのマニュアル、備蓄や必需品の整備も喫緊の課題として推進しなければならぬ。</p>	<p>自己管理 数年前から、学力向上を目指すため、スケジュール等の自己管理能力養成は必須であると考え、中学生からこの課題に力を入れて取り組んできた。中1、2生は「論理エンジン」学習を、中3が総合学習を探究型のレポート作成の内容を行っているが、論理エンジンに関しては、国語科教科との関連性や生徒の実情を考慮再考する時期と考える。中3の総合学習もコロナ禍であったが、3月に発表会を持つことができた。7年目になるOJダイアリーでの取り組みも継続しており、中学生には授業ごと、朝終礼の時間にダイアリーを記入することを習慣づけているが、長期的スケジュール管理、振り返りを意識づけるためには、総合やホームルームなどのまとまった時間を充てることも効果的であると考えている。「自己管理能力の向上」についての教員アンケートの結果は66%の肯定であり、やや下降したが、今後は主体的、積極性、自己管理能力はますます重視される時代となる。情報の溢れる中、自分に必要な情報を選ぶこと、スケジュールを立て自分の生活を管理していくことは課題解決型、探求型学習への第一歩である。SNSから大量に配信される情報を有効に活用して時間とエネルギーを自身の向上に活かすためには、授業・評価のあり方そのものの転換が必要であり、それこそが今行われている教育改革の中心となるだろう。</p> <p>授業・補習内容の充実 高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(BB講座)の成果については、77%と23ポイントも上昇したが、これは水曜講座の見直しによるものだろう。</p> <p>分割授業、習熟度別授業については、肯定的意見が49%と昨年度より18ポイントも下降した。これは生徒の実情に合っていないものとして再考したい。ビッグシスターによる放課後学習プログラムはコロナ禍で中止したが、昨年と横ばいの66%の肯定的回答になっていることは、ほかの各教員による補修活動を評価しているのかもかもしれない。</p>
<p>学校行事について 当然のことだが、学校行事については、昨年度よりも肯定的な意見は下降となった。なにせ行事が中止、縮小、変更になったものであるからだ。しかし、それでもできてる形を模索して、ある程度のごことは実行できたのではないかと、よって落ち込みでも最大5%とわずかなものと示されている。上昇した学年もあり、それは、制約の中でも生徒たちが自主的に楽しんだ所以であろう。自主性を培うにはいい機会にもなったのではないだろうか。これからは、さらに対話的な行事活動を行うことにより、本当の意味での協働学習を身に付けていく必要がある。生徒会役員・生徒会委員及び何かしらのリーダー的役割を担う生徒たちは主体的に行事をよく運営している。</p>	<p>家庭への連絡、情報提供については、肯定的回答は平均すると、さらに80%と上昇した。 コロナ禍で、アカウントメールの一斉配信、クロードサイトなどでの連絡機会はかなり増加した。生徒にはリアルタイムでの連絡が可能になったが、保護者にはタイミングが遅れ知らず知らずのことになるので心配はされたが、紙媒体での連絡よりも効果が見られたことは必至である。次年度は、保護者にもアカウント付与が行われるので、この連絡体制はさらに改善されると思われる。ICT倫理規定の周知徹底に気を付けながら行いたい。また押印の課題もクロードアップされたので、電子書類の普及により、その文化、役目の振り分けにも気を付けていきたい。</p> <p>クロードサイトは緊急時に使用するものであり、NTTコミュニケーションズのFairCastを利用している。</p> <p>思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細やかな情報提供を求めておられるということがあり、教職員・保護者が生徒の自律・自立を阻害しないように、見守り続けるためにも、学校と保護者間の信頼と連携が重要である。このポイントがさらに高く得られるように日々、丁寧な保護者対応に努めたい。</p> <p>今年度は、改めて学校で行える対面型教育の重要性について考えさせられた。保護者にもできる限り子どもとの対話を心がけていただき、心配なことについては、学校に連絡をいただき、連携して見守るように今後も努めていきたい。</p>	<p>新しい学力観・大学入試改革への対応 上記課題について、「教科、学年での話し合い、準備の進捗状況」については、60%の教員からの肯定的回答を得、昨年度とほぼ同じであった。「英語の外部検定受験への働きかけ」についても昨年度よりさらに11ポイントアップの肯定的回答となった。進路委員会中心に様々な対策を行っているが、生徒達の学習意欲向上のためにはまだまだ多くの課題があるのが現状であり改革していきたい「国際特別入試制度及びその制度による入学生の課外授業の成果についての肯定的回答は53%と落ち込み後退している。2020年度に引き続き、2021年度入試では受験者数はかなり上昇し、この入試へのニーズと本校の国際理解教育への期待、評価の表れているという一つの方向性を示していると思うのだが、教職員の思いは追いついていないので、学内への説明がさらに必要だろう。</p> <p>国際バカロレアのカリキュラム・評価方法を学びつつ、本校の教育を見直していくことが、今後の大阪女学院の教育改革の核となる取り組みである。国際バカロレア教育導入への教職員の理解についての70%の肯定的意見(昨年度と同じ)を80%に上げていきたい。</p> <p>協賛校推薦制度の進路保障の意義についても昨年度よりさらに4ポイント上昇。この推薦制度は現在の本校の募集にとっての生命線ともいえるが、今後は今まで以上に多様な進路選択が可能になるよう柔軟かつ幅広い進路指導を推進していきたい。</p>
<p>学校生活について 「楽しく充実している」について、「クラブ活動が活発である」という項目について、コロナ禍であったが、85%前後の肯定的回答が得られた。多くの活動制約で困ることもあった反面、コンパクトな活動時間で行うことを学べたことが、むしろ無駄な疲労感を感じるのではなく充実した自主的活動を見いだせたのではないだろうか。</p> <p>ここ数年、生徒からの相談に対する教員の対応への評価が低いことが心配されていたが、今年度のこの項目(先生は悩み相談に乗ってくれる)の評価は、昨年度よりポイントがアップしている。これもコロナ禍で生徒たちが心配を覚えていることを教員がいつも以上に気にかへ、対処したからと思われる。オンラインや、アカウントを全員に付与したことで、その活用も要因に上げられるだろう。特に高3においての上昇率がとても顕著であった。</p>	<p>ホール会(PTA)活動について、昨年度より8%下降の平均83%の肯定的回答を得た。 本校はPTAを創立者の名前をとってホール会と呼んでいる。先述のとおり、ホール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力していただき、教育活動へ大きな貢献をしてくださっている。</p> <p>今年度は、中高6学年の保護者有志と教職員約200名が集うクリスマス会、制服リサイクル活動、文化祭での私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいていることが、まったくなされなかった。また、発足して9年になるお父様の会ウエルミナ・メンズクラブ(WMC)の活動からも全く活動の機会がなかった。それらのことからのポイント下降であると考える。</p> <p>学校教育への十二分なサポートをいただいている。何より本部役員の方々には、日常の教職員へのサポートのみならず、広報活動として校外で行う学校説明会(evening説明会)に出席していただき、保護者の立場から学校の紹介をしていただく形でご協力をいただいている。心から感謝申し上げます。</p>	<p>理系2コース(2類・1類)の導入 内部生、高校入学生ともに理系への関心が高いことから、2類難関理系大学志望、1類幅広い理系大学志望として2コース制を導入して5年目となった。このことが、生徒たちの進路選択の幅を拡げ、希望する学習環境の提供に役立つかという問いに対して、肯定的解答が55%(昨年度53%)であったことは、このコースの生徒の希望については理解を得られている証拠だろう。ただ、やはり理系1類の生徒のモチベーションを向上させることに苦労している現状がある。1類の生徒達が、当初の理系進路への目標を持ち続け、しっかりと学習に取り組めるような仕掛け、対策を行うことが急務である。</p>
		<p>生徒の生活全般に対する指導 SNSの利用については、「生徒への適切な指導にたい」肯定的回答は66%(19ポイント上昇)、「保護者の理解」と協力を得られたかについて肯定的回答は68%(2ポイント下降)となった。保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断アップ、ネット上でのやり取りからの人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネット友とのトラブルや被害などは後を絶たない。指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にあるものの、その依存度が大きい生徒がいることも否めない。小学生時代からリテラシーや自己管理能力のないままスマートホン使用をしていることの問題を感じる。</p> <p>服装、身だしなみ、公共のマナーの指導については6ポイント下降、挨拶指導については17ポイント上昇であったが、生活指導委員会を中心とした日々取り組んでいる。</p> <p>また、文科省からの指導に倣い、「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定した。コロナ禍で練習時間を短縮するなど、効果的に適切な活動となり、引き続き、生徒の発達段階に応じたクラブ運営となるよう心がけていきたい。</p>
		<p>留学への取り組みの充実 留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出すプログラムも、すべて中止とした。ただ、留学を希望する生徒へのサポート体制も専従員の設置によりさらに充実したサポートとなったことは、教職員の認識(肯定的回答83%)にも表れている。コロナ禍とはいえ、本校では中学生も含めて海外進路に注目している生徒・保護者は多い</p>

進路指導について

例年、中2から中3にかけて、どの学年も高校のコース選択をきっかけに、進路についてよく考えるようになっていくが今年度において中3生は伸びているが中2は少し下がった。あと、コロナ禍の不安が大きかったのだろう、将来のことを考えるポイントは昨年度よりもかなり高い上昇率であった。特に高校生の伸び率はかなり高かった。

国際教育について

毎年、留学生との交流については、アンケートを実施した高校全学年で80%前後の高い肯定的回答を得ているのだが、当然のこととして、今年度の高2は留学生受け入れがなかったため昨年度よりも5ポイントも下降した。反面高校3年生は昨年度下がってその分析として一部の生徒との交流にとどまっているのかもしれないとしたのだが、なぜか今年度は10%も上昇している。その理由はコロナ禍での思考の中で、昨年度のことを改めて思い返したのかも知れない。先述のコミュニケーション力の向上に役立つことと、このような交流が何よりの互いの文化の理解と平和の基礎であると思われられるので、この取り組みはさらに大切に推進していきたい。

授業評価について

今年度は、学校休業中のオンラインから始まり、シラバス達成は苦労した。そのなかでも、年間シラバスの項目について肯定的な意見が昨年度と変わらずにあったことは安堵している。ただ、C「クラスの一体感」やD「教科内容の興味、関心を持てる」E「集中力」の項目において中学1年生と高校1年生が高くないことは気になる。大阪女学院としての馴染みがまだ確立していないまま、1年が終わったのだろう。学校で勉強をするということの意味を丁寧に導いていかねばならない。生徒が能動的に学習できるような授業形態、授業外学習への促しを、IB(国際バカロレア)的教育方法を活用して、ATL (approaches-to-teaching-learning) をより良く取り入れるなどをして、生徒の意欲を高めていきたい。

各教員の授業評価は、同じ教科、同じ学年を何クラスか担当している教員の評価が、クラスによってかなり差があることから、教員と生徒の関係づくりが、授業成果に直結していること、また教員の声かけ、発問一つでその教科への生徒の興味や意欲が喚起されることが確認できる。そして、今年度は、全体として、良い評価を得ていると思う。また、このアンケート結果は全教員へ個別に知らせているが、それを受けて教員自身が自己点検(評価)を行う形を構築していきたい。

今年度はコロナ影響禍の年度であるので、(1)学内での感染症対策、(2)日常の学習内容、(3)ICT教育事情、(4)学費などの費用面、の4点についての質問を行った。

その分析によると、当たり前のことだが、学内での感染予防対策への関心と学習進捗状況はとも高く、今年度の終わりにあたり、学校としての取り組みに、ある程度はご理解いただけたと感謝している。それでも引き続き気を引き締め教育活動を行っていききたい。

ICT教育事情もすでに安心していただいているのか、このアンケート時点での関心ごととしてはパーセンテージは低かった。

学費などの費用面での関心は、12月の時点ではほぼ10%以下で低く安堵していたが、それから3か月経った今はどのような状況下を心配している。

またこれらの準備プログラムはたとえ海外にはいかなくとも、変化する国際情勢を学ぶことは、生徒たちにとって有意義なものとなっている。

人権意識を深める取り組み/心身の健康と安全を守る指導

学校、学年の人権プログラムの充実についても、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)・いじめの未然防止について、教職員のサポートについても肯定的ポイントは高い。教職員の人間関係については、教職員ハラスメント研修でワークショップを取り入れるなど、努力をしているが、まだまだ改善をしていく必要があり、働き方の中での要として、厳しい教育現場ではあるが、助け合い、生徒をサポートのために弛まず向き合っていきたい。

II教育の実施体制の改善

募集・広報活動「本校の特色を活かした取り組みを提案、アピールできているか」「本校の広報活動、募集対策は適切か」「募集・広報に積極的に関わることができたか」の各項目について、肯定的回答率は昨年度よりも上昇し70%~82%と横ばいである。教職員の募集への意識は高まり広報活動への協力も得られているが、コロナ禍でなかなか思うようにできなかった。しかし、入試対策室は、早くからオンライン説明会を開始するなど、よい試みに努めてくれたと思う。時代の厳しさは増しこそすれ緩むことはないが、本校らしい教育を進めていくために互いに意見を交わし合い、課題を共有し、本校の魅力を受験生に伝えていくことで一致していきたい。

図書館活動約17万冊の蔵書を誇る本校図書館は、中高大短が利用する充実した図書館である。専門知識を持つ司書(専任を含め6名)が、手厚く利用のサポートを行い、生徒の豊かな学びに貢献している。教職員の図書館の活用については昨年度よりも9ポイント下降したが、今後も更に活用を推進していきたい。またシステムやサービスの問題よりも教職員が多忙で、図書館を利用するゆとりがない現実も推察される。IBコース教育が図書館利用についても牽引役となることを目指し、また、書籍検索利用のみならず、アクティブラーニング授業の活用していきたい。

教職員の研修プログラム2018年度から本校新任教員対象研修「チームOJ」の代わりに、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムへの参加を義務づけることにしたのだが、今年度はコロナ禍ですべては中止となった。よって、新任研修ができていない状態であるので次年度に合わせたい。多忙を極める中ではあるが、自身の視野を広げ、働き方を見直す上でも、これらの研修会に参加することが必要であると強く感じる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等を今後更に呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。

IV生徒支援

進路指導の取り組み 中学1から高校3年まで各学年での進路プログラムは生徒のモチベーションアップに役立つものなので、コロナ禍でもほぼ実施することができた。(肯定的回答は85%(昨年から4ポイント下降)、高校3年生の大学入試直前のプログラムについては肯定的回答68%(昨年から6ポイント下降)であった。大阪女学院大学、短大との連携については55%(昨年度より9ポイント下降)と少し落ち込んだが、大学短大のユニークで優れたカリキュラムに魅力を感じて、進学先の候補に入れる生徒も増えており、入試情報の共有等、連携が進んでいることは望ましいことである。

V. ICTを利用した授業等への取り組みの推進

チャペルにもwi-fi環境の整備が完了しこれで全館のインターネットインフラが完了した。学校休業で全員に学校公式アカウントを付与し、また過程でPCを持つことができない生徒にも学校所有の“Chromebook”を貸出し、“Google エディケーション”“Classi”を利用しての指導を一気に進めることとなった。IBコース生徒は入学時より“Chromebook”を各自購入。また中3の探究型学習でもH.R教室で学校設置の“Chromebook”を利用して各自がレポートに取り組み研究が深まった。次年度からは中学と高1で一人1台を持たせての学校生活・授業展開を始める。専任教職員全員にも“Chromebook”を貸与し、ほとんどの会議で利用を行いペーパーレス化を加速させた。2019年4月にICT教育推進のための倫理規定を学院として決め、中高ガイドラインを2020年9月に策定し、利用に関するセキュリティ教育も確立のいたので、さらに心に刻んで利用していきたい。何より2020年4月から、中高システムアドミニストレーターを担う人員配置を行ったことは、これらのことの推進に大きく役立ったと評価している。これらのことから、計画の進み具合についての回答は81%もの肯定的回答を得た(昨年時66%)。

VI 教務の新(入力)システムの導入準備

一昨年度中に新システム導入を終了。新学習指導要領に向けてのソフト改良作業が継続中である。2020年度は観点別評価のソフトシステムを確立させた。

VII 危機管理

生徒・保護者・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを継続実施している。ハラスメント防止のための取り組みについての肯定的回答39%と30ポイントも下降した。ハラスメント委員会の機能についての肯定的回答も40%と14ポイント下降である。ハラスメント委員(教職員の互選)は、アンケートで上がった事象について丁寧に対応しているが、教職員の認識がしっかりと根づいていないことが明確に数字として表れていて、問題は根深いと考え。生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして明確に位置づけ、互いに協力してこの課題に全力で当たっていききたい。2018年度から学院全体で教職員の意識向上のため、防止委員会が提案する研修を実施しているが、これを現場に活かせるものとして、各部門単位で行うこととした。中高は2月に行った。

「地震をはじめ防災への取り組みについて」は少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだ多くの課題があり、計画途上である。そのためか回答での肯定的な回答は昨年よりアップしてはいるが60%であった(昨年度より21ポイント下降)。自然災害のみならず、今回のコロナウィルス感染症などの危機への対応についても、引き続きしっかりと対策を行っていききたい。

VIII 施設・設備の保全と充実

さまざまな施設設備の改修が必要となっている現状から、一昨年からアンケートにこの項目を追加した。肯定的回答は昨年度なみの70%であった。経済的な裏付けが必要なことでもあり、なかなか十分と言うわけにはいかないが、教職員の意見を聞き、理解を得て進めていきたい。

IX 教員の労務環境改善

1週1日の研修日等労務環境の改善については、肯定的回答は42%(昨年57%)と初めて5割を切った。研修日を保障することの重要性は理解しているのだが、研修日メンバーの不在を出席メンバーで補い、引き継ぎや共有を行うことの難しさとが教員のジレンマであり、この下降の原因であると考えている。労務環境について改善を目指し新しい形を提案していきたい。また、生徒の教育活動にも関わることだが、文科省からの指導に従い本校でも「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定し、2020年度からは定時(19時)の校舎閉館を実施した。これにより教員の労働過多緩和につながっていききたい。

3. 本年度の取り組み内容および自己評価

	重点目標	具体的な取り組み計画・内容 (中期計画との関連性で記す)	評価指標 *事業計画を基にした質問事項で、通し番号は教職員アンケートの番号です。	評価目標 に対する 自己評価 達成率	自己評価
I. 建学の精神と教育理念の実践	<p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築</p>	<p>時代の求めに応じた宗教教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の礼拝、宗教行事(修養会、伝道週間等)、宗教部付クラブ活動、有志による施設訪問、その他のボランティア活動の継続。 被災者支援の会による東北ボランティアキャラバン(2015年度からは年1回夏)、文化祭時等東北支援物販、追悼礼拝(3月)の継続 日本国際飢餓対策機構、ワールドビジョンの行っている里子支援への協力 学生YWCAを中心とした釜が崎での「炊き出し」への参加 	<p>1. 礼拝、宗教行事などのキリスト教教育全般を通して、生徒に「愛と奉仕」の精神をもって、互いの個性を尊重し合い、自分自身の生き方を考えるよう導いていると思うか。</p> <p>2. 建学の精神を体現する人を育むよう導いていると思うか。</p>	<p>91.7%</p> <p>89.6%</p>	<p>本校の精神の土台であるキリスト教教育については、137年の伝統の中で生徒、保護者の理解と協力を得、「生き抜く力」「愛と奉仕の精神」を養うという人格教育として成果を上げている。</p> <p>自分に与えられた力を、自分のみではなく他者に用いるために学ぶ意識が生徒に育っている。</p> <p>女子校という環境を最大限に活かした教育が実践出来ている。</p> <p>教職員の世代交代の中で、キリスト教教育の理念が時代の求めに応じた形で再認識、再構築されるよう継承していくことが重要であり、今年度も教職員個々の意識でそれが達成できたということは評価できる。</p>
II. 教育の内容と学習支援の充実	<p>1. 学力向上・授業内容の充実・探究型学習への取り組み</p> <p>2. 高等学校英語科・英語教科の改革</p> <p>3. 高等学校普通科文系コース及び理系2コース制の整備、充実</p> <p>4. 国際理解教育の推進、留学制度の充実</p>	<p>(1) 自学自習・自己管理力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> OJダイアリー、学習計画書の活用による自己管理力を身につける指導を継続する。 中学校校舎内にEnglish activityスペースを設置 高校校舎の質問コーナーの拡充の検討。 中高授業での分割授業(中学でのビッグシスター制度や学力定着学習支援によるボトムアップに加え、高校での実力錬成補習、(水)(土)講座、大学入試準備プログラムを継続発展させる。 *ビッグシスター制度...推薦入試で進学先の大学が決まった高校3年生が中学1、2年生の学習を補助する制度。 中1・2学力定着学習支援(数学・英語各週2回)の充実。 *各学年支援の必要な生徒10名を教員2名で、放課後宿題等課題の学習を50分行う制度。 水曜講座(高校3年文系有志補習)、土曜講座(高1・2有志補習)、BB講座を継続、充実させる。 BB講座の英検講座のみ受講する制度の拡充。“スタディサプリ”の推奨。 高1生は“Classi”による「ポートフォリオ管理と学習動画」を行う。 高2・3生は、“マナビジョン”による「ポートフォリオ管理と学習動画」を行う。 中高全館でのWifi設備を完備。インタラクティブな授業展開の推進。 高1IBコース生は、個人端末機を所持し、授業での活用を推進する。 (2) 論理的思考力の育成 論理的思考力の構築のため中学1・2年生に「論理エンジン」を導入し、中3での探究型授業(2018年度~)をスタートしていく。 (3) シラバスの検討・改善 2020年の大学入試改革を見据えて、中高一貫カリキュラムを見直し、各教科でシラバスの改訂を行う。 (4) 英語科英語教科の改革 4技能外部検定試験に対応するため高1・2の英語の授業にスピーキングの内容を取り入れ、GTEC-CBT、他の検定試験も積極的に奨励する。 2015年度S2英語科全員参加で始まったエンパワーメントプログラムの内容の継続・発展。 (5) 「国際特別入試制度」の継続と発展 中学2015年度よりスタートしたこの入試制度の入学後の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。 (6) 国際バカロレアの導入 2018年2月に日本語DP校としての認定を得、英語科国際バカロレアコースを開始させた。このコース授業はもちろんのこと、他の科・コースの授業研究においても、探究型学習、アクティブラーニングについて全教員が授業実践のために、国際バカロレアの学びを深めていく。 (7) 理系2コース制の導入 理系を1類、2類の2コース制を充実したものとする。 YFUの年間留学生受け入れ オーストラリアRavenswood校(姉妹校)との交換留学。 カナダ、オタワLongfield Davidson校(姉妹提携校)*2019年度でもって提携を発展的解消する。 YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月) 中期留学(高校1.2年3学期)の充実上記活動を通して国際理解教育に取り組む。 中学でのプレエンパワーメントを2018年8月からスタートさせる。 夏休み海外研修プログラムの見直し。 	<p>3. 中高6年間の教科指導の目標を明確にして指導できたと思うか。</p> <p>4. 生徒の学力(学力推移調査、またはスタディーサポート等のデータを参考に)は、全体的に見て、1年間で上昇できるよう指導できたと思うか。</p> <p>5. 生徒の自学自習、自己管理の力、e-Portfolioの作成力向上の指導が出来たと思うか。(高校)</p> <p>6. OJダイアリー活用など、生徒の自己管理力の向上の指導が出来たと思うか。(中学)</p> <p>7. 自分の授業を通じて、生徒の学びが向上される取り組みが出来たと思うか?</p> <p>8. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM教室等を有効に利用したと思うか。</p> <p>9. 学院の分割授業、習熟度別授業による成果はあったと思うか。</p> <p>10. スタディサプリ、BB講座、土曜講座(SSS)、水曜講座によって、生徒の学習を補充されたと思うか。</p> <p>11. ビッグシスター制度や基礎学力定着補習による放課後の学習プログラムは成果を上げていると思うか。</p> <p>12. 今後の大学入試等の改革、及び、新学習指導要領への移行(探究型・教科横断型)に向けて、学年や教科での話し合い、準備は進められ、「大学入学共通テスト」対策が出来た(出来ている)と思うか。</p> <p>13. 「総合選抜型入試」の対策指導が出来た(出来ている)と思うか。</p> <p>14. 大学入試の外部検定利用に向けて、生徒たちが英検、TOEIC等、外部検定を受験できるように、学校としての学年、教科、クラブ等への働きかけは十分にできているか。</p> <p>15. 新学習指導要領施行にあたって、観点別評価の教科内での話し合い、準備は進められたか。</p> <p>16. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。</p> <p>17. 高2エンパワーメント授業、外部検定目標達成指導について、成果はあったと思うか。</p> <p>18. 国際特別入試制度、及び国際特別入試による入学生の週1回の課外授業について、国際理解教育のために成果を上げていると思うか。</p> <p>19. 普通科文系コースの生徒のモチベーション向上に関して、充実した指導ができたか。</p> <p>20. 理系2コースの導入により、中学入学生及び高校入学生の進路の選択肢を拡げ、学習の充実をはかることができていくか。</p> <p>21. 国際バカロレアコースの導入により、国際バカロレアコースの教育方法について学習できたか。</p> <p>22. 国際バカロレアコースの導入により、学院教育活動の活性化につながっていると思うか。</p> <p>23. 国際理解教育の推進が出来たと思うか。</p> <p>24. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたと思うか。</p> <p>25. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたと思うか。</p> <p>26. 留学を希望する本校生徒に対して、適切なサポートができていくと思うか。</p>	<p>70.2%</p> <p>63.9%</p> <p>65.9%</p> <p>63.2%</p> <p>89.4%</p> <p>63.8%</p> <p>48.9%</p> <p>76.6%</p> <p>66%</p> <p>59.5%</p> <p>46.9%</p> <p>83%</p> <p>70.3%</p> <p>87.2%</p> <p>74.5%</p> <p>53.2%</p> <p>55.4%</p> <p>55.3%</p> <p>74.4%</p> <p>70.2%</p> <p>68%</p> <p>36.2%</p> <p>66%</p> <p>82.9%</p>	<p>教員は指導目標を明確にし、生徒の学力を上げるべく努力を続けて相応の成果を上げているのだが、目標意識が高いせいか、例年その達成感あまり高い数値で表れてこない。今年度は特にコロナの影響で目的到達度は低いと考えられる。</p> <p>“学力推移”や“スタディサポート”分析から、基礎学力定着を100%まで高められなかった。</p> <p>「自由」実現に必要な自己管理の力を育てるため、継続してスケジュール管理の指導を行っているが、学習や生活の計画を立てたり事後の振り返りをしたりするまとまった時間を一斉に設けることの必要性を感じている。</p> <p>「自分の授業を通じて生徒の学びが向上する取り組みが出来たか」という問いには高い自己評価を得た。個々が日々授業改善を重ねて、目の前にいる生徒達に寄り添う姿勢があった結果である。</p> <p>ネット活用の学習動画ツールの導入がコロナによる休校時期の遠隔授業開始でかなり進むことができた。</p> <p>英語・数学の分割授業は学力の向上に役立っているが十分ではないとの評価である。</p> <p>また、高3水曜講座を新たな講座として開設し事はよかった。さらに生徒達のニーズに合った講座を行いたい。土曜講座はコロナのことで休止をした。</p> <p>日常の授業補習や自宅学習のサポートにもICTの活用をさらに進めていきたい。</p> <p>2018年度からは中3総合での探究型授業による各自のレポート作成を始め、2020年度に始めた高1での「探究的な総合の時間」にSDGsをテーマとした取り組みを開始したことはとてもよかった。さらに研究を進めたい。</p> <p>探究型・合科型の主体的学習への改革をおこなってきたい。観点別評価の改革を2021年度から行えるよう全教科で検討を行った。</p> <p>2018年に国際バカロレアコース(日本語ディプロマ)をスタートさせた。国際バカロレアプログラムの教員の学びが、このコースの生徒の学習のために留まらず、カリキュラム作成、評価方法、体制づくりにおいて、全教科、全授業の探究型、横断型授業のモデルとなっていくよう推進したい</p> <p>2018年度高1生から、大学入試改革の一つであるeポートフォリオ作成のために、“Classi”による自己の振り返りの取り組みを始めが結局、そのeポートフォリオ計画は頓挫したことは遺憾だ。ただ、総合型選抜入試対応に、日々の学習、行事について振り返りを行う意義をしっかりと掴み、さらに進めていきたい。“Classi”の学習動画については充実させたかったが、休校時にベネッセサーバーがダウンしたことにより、その信用度が下がってしまった。</p> <p>新学習指導要領施行に向けて、カリキュラム改変作業を始めた。観点別評価や形成的評価の視点を第一とするシラバスの構築を各教科で行う。高1から「探究的な総合学習」の内容を保健体育教科が中心となってSDGsをテーマに行い、生徒達がより自主的に協働しながら学びを深めている機会となった。</p> <p>英語検定などの資格対策は既に授業等でしており、多くの生徒が積極的に取り組み成果を上げていると評価できる。引き続き資格取得率の向上を目指していきたい。</p> <p>中学から4技能を鍛える英語教科の学習は充実したものであるが、2015年度より高校2年生英語科生徒を対象としたエンパワーメントプログラムを実施し、成果を上げてきたが、今年度はコロナ影響で中止した。</p> <p>中学生に対しては国際特別入試・帰国生入試合格者、英検準2級以上合格者対象に、放課後の国際教育プログラムを続けており、ネイティブ教員の創意工夫による取り組みは一定の成果を上げている。</p> <p>らに授業内容を改革していきたい。</p> <p>国際バカロレアコース設置により、授業計画や評価方法などについて教員が学び、工夫改善が進められている。この取り組みが、学校全体の活性化につながっているという70%の評価を、80%まで引き上げたい。</p> <p>理系2類・1類の2コース制として5年目である。ただ、クラス編成上、生徒のモチベーションや理系科目の力量に幅広い差があり、教員が授業展開の難しさを感じているためこの評価となっている。</p> <p>留学生の受け入れについては、コロナ影響のため一切行えなかった。</p> <p>また、本校からの留学についても同様である。</p> <p>2018年度導入のIBコースは海外進学を目指す生徒にとって意義のあるプログラムとなり、クラスの半数が海外進路である。そのために海外進路のために専門の担当者をおいたことは、そのサポートを手厚くしたことにより、高い評価を得ることが出来た。</p> <p>夏期海外研修の先行を精査し、行き先を変更したが、コロナ影響下で実施できなかった。</p>

	<p>5. 生徒の人権意識を深める取り組み</p> <p>6. 生徒の生活全般に対する指導</p> <p>7. クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定</p> <p>8. キリスト教・人権・生活指導・進路及びHR等すべての活動、行事を総合したプログラムの構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係を構築する力 ルールの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解の育成 SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動等の活動が安全かつ充実したものになるように努める。 生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。 通学時の安全指導に努め、警察と連携しつつ不審者の警戒をする。 学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。 自主的、かつ計画的なリーダーシップ。 協調性とチーム力。 総合的な企画力・整理力(時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等)。 企画・計画書、活動記録の作成、教員の助言と指導。 	<p>27. 解放教育などにより、生徒の人権意識を高めることが出来たと思うか。</p> <p>28. SNSの利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>29. SNSの利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>30. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。3</p> <p>1. あいさつについての指導は適切だと思うか。32.</p> <p>公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>33. 部活動ガイドラインに基づいたクラブ活動指導を適切に行えたと思うか。</p> <p>34. 生徒が自主的に取り組む力を育成するための、プログラムの再構築について考えた。</p>	<p>97.8%</p> <p>65.9%</p> <p>68.1%</p> <p>59.5%</p> <p>61.7%</p> <p>42.6%</p> <p>74.5%</p> <p>68.1%</p>	<p>高校英語科で実施しているエンパワーメントプログラムの中学生版も実施できなかった。</p> <p>解放(人権)教育のプログラムについては、キリスト教教育の「愛と奉仕」の実践と一体となって生徒の心の成長、生きる力となって実を結んでおり、高評価である。今後も時代の変化のなかで、テーマ、シラバスの見直しについて委員会での検討が必要である。今年度の特性として、新入生4月のオリエンテーション時に「コミュニケーションワークショップ」を行ったことは良い試みであったが今年度は実施できないままのスタートであった。</p> <p>SNSの使用指導は、喫緊の課題である。保護者自身の意識が少しずつ高まり、危機感をもって家庭での管理の必要性が理解されてきたように思う。しかし、進化していくSNS利用について、生徒自身が管理を行うことは至難の業である。実際、依存度が高く様々な問題に発展したケースもあったため、このような低い評価である。保護者と協力して、より一層生徒の指導に当たりたい。</p> <p>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導は徐々に成果を上げつつあるが、指導は不十分であるとの評価で、今後も指導を継続する。</p> <p>本校のさまざまな行事は、宗教教育、解放教育とともに、生徒の人格形成に大きな影響を与える教育である。生徒は、行事に主体的に関わる中で、人と繋がり、自分が責任を担い、仲間とともに一つのことを達成していくことの意味を深く感じて、広い意味でのソーシャルスキルを身につけている。しかし、今年度は体育大会は中止をした。高校三年生は自分たちで企画運営を行った。</p> <p>合唱祭や文化祭も規模を変えて、コロナ対策をよく考えながら生徒達は行えたのは頼もしかった。いろんな制約があったが、生徒の自主性を育むことが出来た側面もあるのではないかと。</p> <p>修学旅行は10月延期の高校は実施できたが、中学は3月延期にしていたので、結局実施できなかった。観劇と大正区FWを代替で実施した。</p> <p>キャンパスハラスメントについて、年度末のアンケートへの取り組みや委員の働きは評価されている。しかし、防止のため対策は十分とは言えず、不断の努力をしていきたい。</p>
<p>III 教育の実施体制</p>	<p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>2. 教職員の組織改善と総合的教育プログラムの構築</p> <p>3. 中学・高校図書館機能の充実</p> <p>4. 中学・高校教員の人材育成</p>	<p>(1) 広報の充実。</p> <p>(2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み。</p> <p>(3) 入試対策室の充実。</p> <p>(4) 中学「国際特別入試制度の継続と発展</p> <p>(1) 中高6年を偏りなく経験できる人</p> <p>事。</p> <p>(2) 世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承。</p> <p>① 建学の精神の学び。</p> <p>② 世界の変化や課題についての学び。</p> <p>③ 支え合う組織づくり。</p> <p>④ 他校との連携。</p> <p>⑤ 新しい学力観への対応。</p> <p>⑥ 新しい授業形態(アクティブラーニング)への対応。</p> <p>(1) 蔵書の充実 (2) 利用教育 (3) 広報の充実 (4) 図書委員会活動 (5) その他</p>	<p>35. 変化する時代の中で、社会の課題に対して大阪女学院の特色を活かした取り組みを提案、アピールできていると思うか。</p> <p>36. 本校の広報活動、募集対策は適切だと思うか。3</p> <p>7. 募集・広報に積極的に関わることができたと思うか。</p> <p>38. 解放・生活指導等教職員研修会、学院全体研修会、学院ハラスメント学習会キリスト教学校教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っていると思うか。</p> <p>39. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたと思うか。</p> <p>40. 学内で教職員がお互い支え合う協働活動が出来ていると思うか。</p>	<p>70.2%</p> <p>82.9%</p> <p>68.1%</p> <p>53.2%</p> <p>57.4%</p> <p>44.7%</p>	<p>コロナ禍であったので、5月から入試対策室がオンラインでこまめに生徒募集活動を行ってくれたことが、最終的な出願者数につながった。そして対面解禁になってからは全教職員で活動ができたと考えている。中学校訪問も行った。引き続き中学校との連携を大切に続けていきたい。</p> <p>オープンキャンパス、イブニング説明会、地域説明会、入試説明会、キャンパスナビと本校の魅力を教員一人一人のことばで受験生に伝えることが大切である。私学の受験事情は今後も厳しい。生徒の成長を第一とし、教育内容の充実を大事にして、運営を進めていきたい。</p> <p>教職員の世代交代が続く中、建学の理念をはじめとして、指導上の財産の継承が急がれる。ふだんの業務の中だけでなく意識的に語り合う機会が必要である。多忙を極めるため研修への参加もままならない現実であるが、教科指導や生活指導のスキルの継承をしていくことの意義は大きい。教職員間で、互いの悩みや募る思いをことばで伝え合う機会は重要であるので、その体制作りにも尽力していきたい。評価としてコロナ影響で、対面の研修がほぼ中止となったため、評価は低い。</p> <p>全生徒への丁寧な利用ガイダンスが行われ、授業や課題などで、十分活用できる充実した図書館であり、司書の助言も受けられるため恵まれた環境であり、生徒は自由に利用している。ただ、授業での利用は一部に留まるという評価だ。今後の授業、レポート課題等における利用の研究は勿論のこと、読書の大事さをアピールしていくことが必要である。</p> <p>教職員どうしの支え合いの認識がとても低いことは管理者として責任を感じている。体制など対策を練っていきたい。</p>
<p>IV. 生徒支援</p>	<p>1. 自己実現を促す進路指導</p>	<p>(1) 進路キャリアガイダンスの充実</p> <p>(2) 基本的学習習慣の確立</p> <p>(OJダイアリー・ビッグシスター制度)</p> <p>(3) 英語外部検定への対応</p> <p>(4) 新しい大学入試への対応</p> <p>(5) 併設大学・短大の特色を活かした進学指導</p> <p>(6) 協定校推薦枠の拡大</p> <p>・宗教・解放プログラム</p> <p>・グローバル進路</p> <p>・大学院との合同プロジェクト</p>	<p>41. 新しい学力観、探究型学習の対応についての学びを推進することができたか。</p> <p>42. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p> <p>46. 各学年で行われる進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っていると思うか。</p> <p>47. 3学期の大学入学共通テスト対策、私大、2次対策のプログラムは、大学入試直前のサポートとして成果を上げていると思うか。</p> <p>48. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。4</p> <p>9. 海外進路担当部署に担当部署設置は指導において充実したものとなったと思うか。</p>	<p>44.6%</p> <p>67.3%</p> <p>85.1%</p> <p>68.1%</p> <p>55.3%</p> <p>72.4%</p>	<p>中高での進路指導のプログラムは、生徒により影響を与えているとの評価だ。また進路室からのさまざまな情報の発信は時代の変化に対応して、適切であると言える。</p> <p>国公立センター入試、前期、後期入試をサポートする高3の3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために定着しつつあるが、これら一般入試に挑む生徒の数は年々減ってきている。高3の秋までの推薦入試で進路を決めている生徒が半数を超えているため、その対策も充実させたい。また国公立の推薦入試に対しても1年を掛けて指導していきたい。</p> <p>中高の卒業生、教員の、大学短大への認識は変わり、とても身近なものになってきた。教育内容への理解が進み、評価も上昇してきている。連携は確実に進んでいる。</p> <p>関西学院大・同志社女子大・神戸女学院大との協定校推薦制度は、魅力ある制度として生徒たちの進路保障に役立っていると評価を得ている。同時に今推薦のエントリー資格としてかなり高い英語力が求められるため、高校に入学した早い段階から英語の資格試験に挑戦する生徒が増えている。また評定の向上を目指して学力向上に努める生徒も多い。その反面、学力は高くても、行事やクラブ活動、ボランティア活動等で培われる人間力やソーシャルスキルについて十分に育っていない場合も多い。協定校に限らず、推薦入試を利用している進学指導には、高校入学の早い段階から人間力やソーシャルスキルを培うための教育内容を充実させていく必要がある。</p>

	2. 心身の健康と安全を守る生活指導と生徒支援	自ら健康の保持増進を図る能力を育成するために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームが連携し生徒・保護者をバックアップする。必要に応じて医療機関や関係諸機関と連携をとり、適切な支援を目指す。	43. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。 44. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。 45. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い、助け合って取り組むことができたと思うか。	89.4% 78.7% 63.8%	海外進路担当部署を設置したことは、大変大きな発展を生んだ。コロナ禍であってもニーズは多い、さらに推進していきたい。 支援教育委員会(2010年設置)は、教頭がコーディネーターを担い、担任、学年主任、スクールカウンセラー、養護教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長が構成員となり、校長のもとにチームで支援プログラムを検討する体制が機能している。担任が一人で抱え込まないで、適切なサポートができるように互いのコミュニケーションを大切にしていきたい。ただ昨今の支援を必要としている生徒への対処の方法は、今まで以上に多様化しており従来と同じような形では立ち行かなくなっている。保護者への支援こそが必要な場面も多々ある。今後はコーチング力などの学習会を開催して、教員の力を伸ばしていきたい。 この支援機構養育委員会は、いじめ防止対策委員会を兼ねている。いじめについての相談があった際に招集することになっており、教職員から選ばれたメンバーで構成されるキャンパスハラスメント相談委員の会も重要な働きを粘り強く継続しているが、一般教員には見えにくい活動であるため、意義が明らかになっていないところがあるとともに、同僚同士で忠告・助言し合うシステムの難しさがあることも確かである。
V. 改革・改善	1. 時代の求めに応じたキリスト教教育の充実と推進 2. 生徒の学力向上について 3. 留学制度の充実 4. 海外進学サポートの充実 5. ICT教育の推進 7. クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定	ICT 技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する下記の ICT 教育推進のためにガイドラインの策定を行う。 (1)中高校舎の Wi-Fi 環境の整備を行った Wi-Fi環境の整備計画を策定し、チャペルなど順次工事を行う。 (2)モニター教員にタブレット型情報端末を配布した。研究を進める。 (3)中学1年生(高校1年生)の入学時のタブレット型情報端末保持を想定し克服すべき課題等について検討する 2018年度は、IBコース生とのみ個人端末機の保持をスタートさせた。他科・コース生については学校備品貸し出して展開をする。 (4)教師、生徒のタブレット管理はもとよりセキュリティーについても対策を検討する。	52. 教職員組織はキャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいると思うか。 53. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能していると思うか。 50. ICT を利用した授業等への取り組み、今後の計画は進んでいると思うか。 51. ICT 教育を推進するために導入した担当部署設置は適切に稼働していると思うか。	38.3% 40.4% 80.8% 78.7%	このハラスメント対策の評価が非常に低く、大きな問題だと考える。小さな集団であるなか、閉塞感が先に立っているのが良くない。お互いが「ひとつやさしく」をテーマにしていきたい。 学習に関わる ICT 環境、施設整備については、コロナ禍のオンライン遠隔授業の推進で一気に進んだ。次年度からは年次、1人1台の端末機所持を実施する。これを各行事の振り返りや、探究的授業展開、また基礎学習補完のために十二分に使用していきたい。
V. 教務の新システム導入	6. 中学・高校教務の新(入力)システムの導入準備	(1)成績処理等のための入力に関しては、独自のシステムではなく、新システムに移行することも視野に入れ、本格的に研究する。 (2)各会議や出席管理から成績処理に至るまでタブレット型情報端末を利用した新しいシステムに移行する準備を始める。			教務担当教員には、人員減の中、多大なる尽力をしていただいているが、大きなシステム変革は出来てきている。学内 LAN のセキュリティ強化対策、また、これからのカリキュラム編成のために、さらに改革が推進していく。
V. 危機管理	8. 学校危機管理についての検討	(1)大地震を想定した危険回避訓練を、教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。 (2)地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の管理の対策を行う。	54. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいると思うか。	59.6%	地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、取り組みは進んでいる。非常食、水の備蓄、非常電源の確保、簡易トイレ等、購入を進めた。今後も地域と協力して計画的に進めていく。 新型コロナウイルス感染症対策は、2020年度内においては生徒や教職員とも大きな感染状況ではなかったが、引き続きしっかり行っていきたい。
V. 施設・設備の保全と充実	9. 中長期的財政計画-施設・設備の保全充実、経費の削減と効率化	・高校北・東校舎外壁補修工事を行う ・その他の施設について、整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。	55. 校舎、校庭、グラウンド等の施設・設備の保全、補修、整備について、必要に応じて計画、実施されていると思うか。	70.2%	毎年、経年劣化による補修工事は続いている。計画的な実施の間隙を縫って、直ちに必要な補修に追われている感があるため、このような評価になっていると考えられる。 コロナ対策備品の充足については、検温器など、進めている。
V. 教員の労務環境改善	10. 教員の労務環境改善	・1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。 ・育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。 ・今後は介護休暇についても検討を進める。 ・また、出勤管理のIT化にも検討を進める。	56. 一週一日の研修制度は、労務環境の改善は進んでいると思うか。 57. 労務管理は適切に行われていると思うか。	42.5%	1週1日の研修日制度は、教員の休日を確保する上では有効であるが、当然のことながら、生徒教職員全員で一斉に取る休日とは違うので、教職員間の連携、クラス・学年・教科間の情報共有が不可欠となる、また臨時の会議をすることが難しく、定例の会議の回数も限られるなど、負担のお大きい制度であり、一概に労務環境が改善されているとは考えにくい。そのためこのように芳しくない評価になっていると考えられる。教育効果の面からも再考が必要である。

<p>経費削減と効率化</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。 ・諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。 ・補助金制度を有効活用する。 			<p>各部門の経費の健全化に努めている。教職員の健康面からの休職が続いており、その補充のために追加予算が毎年のように行わざるを得ない状況である。教職員の労務管理をしっかりとしていかなければならない。</p>
<p>その他</p>	<p>計画にないことで、コロナ禍の影響についても振り返る。</p>		<p>58.今年度、生徒の学校生活指導において、コロナ禍の影響はあると感じるか？</p> <p>60.今年度、生徒の学習指導において、コロナ禍の影響はあると感じるか？</p>	<p>95.8%</p> <p>87.5%</p>	<p>あたりまえのことだが、教職員はコロナ影響の負の部分も多く感じている。</p> <p>一番多くみられた意見は、やはり生徒達の発達段階の1時期での、コミュニケーション力育成が出来なかったという点である。行事のみならず、いかに日常の何気ない関わりが、人を育成することに大事な役割をになっていたのかを痛感する。</p> <p>また、子ども達はやはり様々なことに疲れている。そのために教職員がゆったりと傾聴してあげることの不足について、出来なかったという教員もおおくみられた。</p> <p>学習面でも、リモートや対面時の対策で様々な工夫を行った意見があり、それぞれによく対処したと思っている。しかし、特に自主的学習ができなかった生徒達への懸念は残っている。</p> <p>リモートは万能でなく、むしろ補助的な方策でありツールにすぎない。</p> <p>生徒達が困難に立ち向かえられるような、そんな本物の教育を行ってきたい。</p>